

Title	子どもの病と死をめぐる親の経験：小児がんで子どもを亡くした親の語りから（共同研究報告：臨床死生学研究）
Author(s)	越智, 裕子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-4 : 19-20
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2340
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

Seigakuin Repository for academic archive

【臨床死生学研究】

子どもの病と死をめぐる親の経験 —小児がんで子どもを亡くした親の語りから—

2009年11月14日、新都心ビジネス交流プラザ4階聖学院教室にて第5回臨床死生学研究会が開催され、洗足学院短期大学 非常勤講師で、NPO法人グリーンケア・サポートプラザの三輪久美子氏から発表があった。ここでは、本講師の学位研究である「小児がんで子どもを亡くした親の語りから」から、彼らの現状を紹介し、その問題的や課題、さらには実践へのサジェスチョンを行っていた。

本講師が、同研究を行った目的は、子どもの小児がん闘病と死をめぐる親の主観的経験における内的変容プロセスを明らかにすることと、明らかになったプロセスから、そのプロセスに影響を及ぼす要因を特定し、ソーシャルワークの視点からの援助モデルを提示することにあった。そのため、同研究では、対象を、小児がんで子どもを亡くした夫婦で「ガンの子どもを守る会」に所属する者に限定し、研究実施は、2004年5月～2005年12月であった。

同研究の結果と考察として、本講師は、①親の主観的経験における内的変容プロセスを、(1) 一体化（ともに闘うなど）、(2) 混沌（受け入れられないなど）、(3) 諦念（死の事実を認めるなど）、

(4) 内在化（内なる実存として新たに生かすなど）などがあるとした。また、②母親と父親の違いを、(1) 子どもとの絆の再構築そのものは、母親と父親での違いは認められない、(2) 母親と父

親では、他者とのかわり方に大きな違いが認められる、(3) 父親たちのほうが、絆が安定化するまでには母親たちよりも多くの時間を要するとした。③そして彼らの援助法を、上記のプロセスから2つの分岐点を区分し、(1) 第1の分岐点として、[死の事実を認める] 方向へ移行するか、[切望と探索] に停滞するかどうかの分岐点があること、また、その要因には、自分を理解し、受け止めてくれる他者とのであろうこと、体験を物語ること、ともに闘った経験が影響を及ぼすことを明らかとした。(2) 第2の分岐点(悲しみの発作)が起こった時、(ともに生きる) 方向へ移行するか、(切望と探索) に逆行するかどうかの分岐点があること、その要因には、死別からの時間、他者に子どもを語ること、悲しみの社会化があることを明らかとした。④プロセスの時期に応じた援助を、(1) 第一の重要時期では、子どもと(ともに闘う) ことを支えること、(2) 第二の重要時期では、親が子供の(死の事実を認める) ことを支えること、(3) 第三の重要時期では、新たに生かした子どもと(ともに生きる) ことを支えることを目標にする必要性を明らかとした。そして、最後に、⑤絆の再構築を支えるソーシャルワークの視点を、(1) 生態学的アプローチの視点を持つこと、(2) 人間の変化と可能性を見据えた視点を持つこと、(3) パートナーシップの視点を持つこと、(4) 媒介的役割を重視する視点を持つこと、(5) アウトリーチの視点(父親に対しても)を持つことを提言していた。

(文責：越智裕子 アメリカ・ヨーロッパ文化学
研究科博士後期課程)

(2009年12月21日、聖学院大学1号館1階コモン・
ルーム)

